



軽いサイン音がして、着席サインが点灯する。そろそろ降下に入るのだろう。着席したところからシートホルドがオンになる。こうなるともう立ち上がることはできない。全員の着席が確認されると、着席サインがグリーンに変わる。これで着陸準備は完了である。軽いショックがあつて、機体が降下を始めた。到着地の指向性磁場に乗ったのだろう。だが、少し降下したところで、機体がいきなり振動を始めた。振動はだんだん強くなっていく。

「何？これ」

美空が周囲を見回して叫ぶ。

「磁場とのシンクロがおかしいみたいだな。こりやまずいかもしれない」

とフランク。

「まずいつて？」

「このままだと着陸できないってことだ。減速を続けたら地上に激突するかもしれない」

ダイブが付け加える。

「なんとかならないの？」

と美空。

「この機体は全部自動だから、下でなんとかしてくれないと、こっちはどうしようもないよ」

サラが美空を見て言う。その直後に、視界にブロックノイズが入って、サラウンドビューが途切れた。

「どこかシステムがおかしくなってるみたいだな」

「下も気づいてるんじゃないか？復旧できないんだったら、すぐに磁場を切ってくれば時間稼げるんだけどな」

「いや、磁場を切ったら前後を飛んでいるシャトルも道連れになってしまう。それは無理だな」

「でも、それじゃこのシャトルは墜落するぞ」

「こつちでなんとか出来ないかな」

「ダメだろう。この機体は、人が操縦することを前提としていないから」

ダイブとフランクのやりとりを聞いていたアンリが口を開く。

「ねえ、非常用のシステムとか、ないのかな。保守用の機能とか」

「保守用か、もしかしたら・・・」

ダイブが、船のシステムをあちこち調べ始める。

「ダイブ、どうする気だ？システムにアクセス出来たとして何が出来る？」

「うまくシンクロできないんだったら、いつそ機体の誘導磁場を反転させてしまえば再加速できるかもしれないと思うんだけど」

「そりゃ、賭けだぞ。間違ったらどこに飛ばされるかわからないからな」

「ダメだ・・・アクセス出来るシステムからは動力系のコントロールは無理だな。あとは物理的にやるしかないけど、シートホルドがかかった状態じゃ身動きが取れない」

「ちよつと待って・・・なんとかできるかもしれないから」

「なんとかか、って、どうするつもりだ？ サラ」

サラは黙って、なにやら宙を見つめている。

「いいわ、これで保守用コンソールにアクセスできるはず・・・あとは任せたわよ、ダイブ」

サラがそう言うと、ダイブの前にコンソールのパネルが現れた。

「驚いたな、どうやったんだ」

「話は後よ、とりあえず、この状況を何とかしてちょうだい」

ダイブはコンソールをあれこれ操作していたが、やがて振り向いて言った。

「よし、磁場を反転させるよ。ちょっとショックがあるかもしれないけど、頑張ってくれよな」

そう言うと、ダイブはコンソールに最後のコマンドを打ち込む。その瞬間、ガクツつと大きな衝撃があつて、機体が急激に高度を上げ始めた。

「よし、とりあえず墜落はまぬかれたみたいだ。これで周回軌道に乗れる。しばらく時間が稼げるな」

「でも、それほど長くは稼げないわよ。このシャトルの生命維持システムはそれほど長時間持たない。せいぜい月を1、2周するくらいよ」

美空が言う。

「そうだな。なんとか下と連絡が取ればいいんだが」

「誘導装置もだけど、通信システムもおかしいわね。コミュニケーションリンクが切れたのが不具合の原因かもしれないわ」

とサラ。

「とりあえず、調べてみよう。シートホルドを一旦解除するよ」

ダイブがそう言うと、シートホルドが切れて、全員が動けるようになった。

「あの、いったい何が起きたんですか？」

2人連れの女の方が不安そうに尋ねる。彼らも乗客がもう2人いるのをすっかり忘れていたわけで……。

「どうやら、このシャトルのシステムに不具合が起きて着陸に失敗したみたいです。とりあえず、墜落しないようにシャトルを軌道に上げることは出来たんですが、今、この後どうするかを考えているところです」

とダイブが答える。

「何か手伝える事があれば・・・」

と男の方。

「大丈夫です。我々は、こういう場合の訓練も受けていますから、任せてください」

フランクはそう言うのだが、実は彼らもこんな状況を経験したことはない。一般客を不安がらせないための配慮なのだが、本当はまだ次の手が思いつかないでいる状態だ。

「お願いします。何かあったら言ってくださいいね」

「わかりました。その時はお願いします」

フランクがそう言っている間に、デイブがシャトル後部の壁にあるパネルを開けようとしている。もちろんロックされてはいるのだが、保守コンソールがあればロック解除も可能だ。

「これが使えて助かったよ。でも、いったいどうやってプロテクションを外したんだ？」

とデイブがサラに尋ねる。

「それは内緒。まあ、C&Iには、色々と技があるのよ。いいから、早いとこ修理しちゃってよね」

「そんな簡単に言うなよ。まだ原因も分からないんだから」

そう言うってから、デイブは、例の2人が不安そうに見ているのに気がつく。これは、うかつな会話はできない。せっかくフランクが大見得を切ってくれたのだから、これ以上、不安を与えるわけにはいかないのである。

デイブはパネルを外すと、その中に身体半分潜り込んだ。

「メインコンピュータは正常みたいだな。でも、やっぱり通信機が動いていないみたいだ。パワーが落ちてるぞ」

「原因はわかるか？」

「パワーユニットからのラインが死んでる。しかも予備系統もだ。こんなことってあるのか？」

「でも、パワーユニット自体が死んだら何も動かないはずだし、通信機へのエネルギー供給だけが切れるなんてことがあるのかな」

「すまん、そっちのほうの回路はあまり詳しくないんだ。過負荷がかかって、両方とも落ちた・・・くらいしか理由が考えられないんだが。フランク、前の方のパワーユニットを見てくれないか」

「わかった。ちょっと待ってくれ」

フランクはキャビン前方の床にあるパネルを開くと、床に這いつくばってのぞき込んだ。

「パワーユニットそのものはやっぱり生きてる。出力ラインが1本だけ死んでるみたいだけど、これが通信機に行ってる奴らしいな。予備ユニットも同じだ」

「安全装置が働いたのなら、一度リセットかけてみたらどうだ？」

「原因が分からないのに、まずくないか？ パワーユニット自体が壊れたらアウトだぞ」

「それもそうだが、他に何か手はあるのか？」

フランクとデイクがそんな会話をしている時だった。

「大丈夫だと思うよ。このパワーユニットの場合は、個々の回路が壊れても全体に影響しないようになってるから。どうしても気になるんだったら、一度、コネクタを外してからリセットしてみればいいんじゃないかな」

後ろから声をかけたのは、例の2人の男の方だ。

「お詳しいですね」

「大学で実験に使っているユニットがこれと同じ系列のものなんだ。かなり旧式な奴だけど、そのぶん頑丈だから、簡単には壊れないよ。パワー消費の変化が激しいと不安定化して回路が落ちることがあるから、もしかしたらそれが原因かもしれない。実験室ではパワーラインのコネクタの装着不良とかが原因で落ちたこともあるから、一度外してリセットしてから取り付け直すといいかもしれないよ」

「わかりました。やってみましょう。デイク、俺はこっちを外すから、そっちも外してくれ」
「わかった。外すぞ」

フランクとデイクはそれぞれ、一本ずつ、パワーラインのケーブルを外す。このケーブルは特殊な光ファイバーで、高密度のレーザー光を伝送するものだ。この細かいケーブルでも毎秒最大1メガジュールのエネルギーを伝送できる。短距離シヤトルだが、万一の場合を考えて近距離用ワイプ通信チャンネルを使用できるようにするため、これだけのエネルギーが必要になる

のである。もちろん、そんなエネルギーが漏れたら大惨事になりかねないので、ケーブルの接続確認のためのセンサーが取り付けられている。正常な接続を確認できなければパワーを遮断する安全回路が入っているのである。

「よし、じゃ回路をリセットするぞ」

フランクがコネクタ横のリセットボタンに触れると赤色だったランプが黄色に変わった。

「どうやら、大丈夫みたいだ。何かの理由で安全回路が働いたのかもしれない。じゃ、ケーブルを取り付けてくれ」

「了解」

二人がケーブルを取り付けると、黄色いランプが点滅を始め、やがてグリーンに変わった。

「よし、こっちはOKだ。そっちはどうだ？」

「こっちもOKだ。通信機のパワーが戻った。サラ、ちよつと非常回線を試してみてください」

「おっけー、ちよつと待ってね……。ん、大丈夫。データリンクを確立できた。こっちの状況は知らせておくわ。むこうの準備が整ったら非常回線経由でシャトルのコントロールを地上に渡すわね」

「ふう、どうにか一段落だな。あとは地上側に任せよう。しかし、こりやどう見ても整備不良だな。一度総点検した方がいいかもしれないな」

そんなことをしている間に、シャトルはほぼ月を一周しかかっている。ちよつと、昼から夜の境目あたりだ。

「コペルニクスエリアは混雑が激しいので、予定通り、マリウス・シャトルポートに誘導してくれるそうよ。ケプラーの管制センターが軌道を調整してくれるって」

サラがそう言った直後に、着席サインが点灯した。

「ありがとうございました。助かりました」

フランクが男に向かって言う。

「いや、僕なんかがお役に立てたんだったら嬉しいですよ。こちらこそ、ありがとうございます。君たちこそ命の恩人だ」

男はそう言いながら、自分の席に着く。女の方は、ほっとした顔で男に寄り添った。二人はそつと手のひらを重ねるようにする。二人のしている揃いのブレスレットが淡い光を放っている。

「かなり冷や汗ものだったけどね」

「ちがいない・・・」

そういうサラの隣にフランクが座りながらそう言う。洞窟ツアーはかくして最初から波乱の幕開けとなった。



やがてシャトルは何事もなかったように、マリウス丘のシャトルポートに着陸した。出迎えた航路局の係官に手短かに状況を説明しただけで、彼らはすぐに解放され、洞窟ツアーに戻るようになった。おそらくシャトルの運航会社は、すべての機体の総点検と整備体制の見直しを命じられることになるだろう。

「どうなるかと思ったけど、なんとか今日の予定はこなせそうね」

地下洞窟の入り口に向かって歩きながら、サラが言う。ツアーと言っても、安全のため決められたグループで行動する以外は、これといった制約もない。洞窟内はエアシールドが張られて空気が満たされているため、特に宇宙服は必要ないのだが、万一の時のために、ツアーデスクで個人用のエアシールド発生器を貸してくれる。万一周囲の気圧が急激に下がった場合、自動的に作動して気圧の低下を防ぐと同時に、短時間だが酸素も供給してくれる。その間に、順路のあちこちに設置されている緊急退避所に避難することになる。まあ、そうした事態はめったに起きないから、それほど心配することもないのだが・・・。

「ほんと、出だしから災難よね。いったい誰の行いが悪いのかしら」

と美空が、男子たちを横目で見ながら言う。

「ま、そりやお互い様だと思っけどな。とりあえず、無事にここまで来られたんだし、そんなことはもう忘れようぜ」

とフランク。男子たちはうなずくが、美空はちよつと不満そうな顔をしている。そうこうしている間に洞窟入り口のシャフトの前までやってきた。

「ここから降りるのね。とりあえず、全員、非常用シールドのチェックだけしておいてね」

サラが言う。ツアーチケット確認ゲートの向こうには、昇降シャフトがあつて、そこから地下洞窟に降りるのである。地下200mほどにある洞窟の中央部までまっすぐに降下するわけだ。

「それじゃ、第11探検隊。出発！」

サラが、おどけた感じで言い、全員、ゲートを通つて、シャフトに入る。

「そう言えば、まだ自己紹介してなかつたですね。俺はフランク・リービス。このメンバーは附属高の仲間で、星野美空、サラ・ホイットニー、それからデイビッド・ムラカミ、そしてアンリ・ガブリエルです」

フランクが全員を紹介する。

「あ、失礼。僕は浅沼健太、こっちは、中井美由紀。僕らは東京で同じ大学に通つてる。僕は工学、彼女は歴史が専門だけどね、よろしく」

「浅沼さんと中井さんですね。よろしくお願いします」

「あ、健太と美由紀でいいよ」

「ところで・・・」

と健太・・・

「アンリ・ガブリエルって、君、もしかして、このまえ遺伝子工学会で研究発表してなかつたかい？」

「あ、ご存じでしたか？ ノース・リムでやったやつですよ」

「やっぱり？ すごく興味深い論文だったから覚えてる」

「じゃ、健太さんもノース・リムに？」

「いや、残念ながら、論文を読んだだけけどね。そうか、それならさっきの話も納得がいくな。実は、僕の研究も、君の論文からだいぶヒントをもらったんだ。人の本質的な部分に直接アクセスしようという試みがすべて失敗する理由についての考察は、とても参考になったよ」

「それで、間接的なアクセス方法を考えようとしているわけですね」

「そうなんだ。でも、まだまだ先は長いけどね」

二人がそんな会話をしている間に、彼らは縦穴を抜け、地下洞窟の巨大な空洞へと降りて行った。洞窟の天井の高さは数十メートルくらいあるだろうか。七色の光でライトアップされているが、かなり荒々しい溶岩洞窟である。

「うわー、すごいな。こんな天井が高いなんて」

とアンリが叫ぶ。

「これって、大昔。月ができた直後に、溶岩が流れて出来た洞窟なんですよ？」

「そうだよ。出来た直後は、月にも活発な火山活動があったんだ。でも、すぐに冷えて固まってしまったけどね。ここはマグマだまりの跡らしいよ」

周囲には、ほかのグループとおぼしき人たちもいる。ここは通称、大ホールと呼ばれている部分。洞窟ツアーの入り口になっている。ここから、あちこちに小さな洞窟が伸びていて、各グループごとに、好きな洞窟に入って探検するわけだ。洞窟の総延長は数百キロになるが、観光用に開放されているのは、ここから半径数キロの範囲のみである。洞窟によっては、かなり険しいものもあるので、その難易度によってランク分けされている。Dランクは子供や体力のない人でも、十分楽しめるレベル。Aランクは、ちょっとした山登り並の体力がいる。とはいえ、観光用の施設だから、危険なほどではない。

「で、どっちへ行くの？」

美空が尋ねる。

「そうねえ。ちよつと詳細データを出してみよっか？」

サラがそう言うと、空中に洞窟のマップが難易度別に色分けされて表示された。既に洞窟に

いる人の位置も表示されている。

「やっぱ、お手頃なCランクあたりが一番混み合ってるわね。どうする？」

「当然、Aランクじゃないの？」

と美空。

「おいおい、俺たちだけじゃないんだから、無茶言うなって」

とデイブ。

「あ、あんまり気にしなくていいよ。でも、確かにAランクはちょっと辛いかもしれないけど」

健太が言う。脇で美由紀とアンリが大きくうなずいている。

「じゃ、Bランクで比較的、簡単そうなコースを探そう。どれか良さそうなコースはないかな」

フランクが、マップ見ながら言う。

「これなんかどうかな。人もいないし、起伏もそれほどなさそうだから」

サラが、ひとつの洞窟を拡大して立体図を表示する。かなり入り組んだ洞窟に見えるが、コースの高低差は少なそうだ。とりあえず、全員異議はなさそうなので、そちらへ向かうことにする。

「結構狭いね」

アンリが洞窟の入り口を見て言う。

「うん、いい感じじゃないの。何か出そうでき・・・」

とサラが意地悪そうに笑う。

「えー、やめてくれよ。僕、そういうのは苦手だから」

「これも附属高七不思議だよな。先端科学の申し子、アンリ・ガブリエルが、お化けを怖がるなんてさ」

フランクがアンリの肩を叩きながら楽しそうに言う。まあ、この手の話は、どれだけ科学が発達してもなくなならない。人の心の闇とでも言うのだろうか。そういう意味では、人は大昔から本質的に変わっていないのである。

「あのー、私もそういうのは苦手なんだけど・・・」

小さな声でそう言ったのは美由紀である。健太が脇で苦笑いしているところを見ると、彼女もかなりダメな部類のようだ。

「いいじゃない。出たら出たでとっ捕まえれば面白いんじゃないの」

「そうだな。捕まえて見世物にでもするか」

美空とデイブはそんな感じで、真っ先に洞窟に入ろうとする。

「待ちなさいよ。一緒に行かないと危ないよ」

サラもそう言うと二人の後を追うように洞窟に入っていく。そんな感じで、7人の洞窟探検が始まったのだが・・・。